**極**ごく

**道**さ

**生**じ

徒と

会かい

**秋**を あきば

**美里** 

## 第 |嵐を呼ぶ女達

過ぎるもの、 学と同様、 と予 高校生活三年なんてあっという間 てい たのは 約 凋 間 前 0 入 学

認識 関わらなければ ていた彼 女 達と関 た と関わらざる得ないいして厄介な事には なら 羽 目 な に 陥 1 لح

あれは、 僕の生活は否応なしに非日常的なものへと一 てからというもの、 起きるべ くして起きたとでも言えば 立て続けに起きた出来事 何て表 ずから、 転した。

現したらいいだろう? のところ運命という表現に運命の力? それとも違う だろうか? いや、納得い

かない。ならば、

さによるものだろう。 と言いたいのだが、結局 てしまうのは、 僕のボキャブラリーの貧困

仮 で出くわ ,苦し この世に運命の女神なんても って みの 11 .すチャン る に違い たうつ姿をどこかで見ていて腹を スがあ ない。 意地 ったら、 が のが 悪 γ) 思いつく限 . 奴だよ。 いるなら

態を

ついてやろうと思う。

れが運命だなん

っただろう、 てふざけ なよ。 ってね 生 贄に しか !選ぶの 最後 は 僕で 12 は なくて 愚 痴 もよ カ H カ

てこない自分って、……何だろう?

ない に でもな 僕が でも何か れと開 運命を呪うのは女々しいだろうか 0 いめぐり き直れる程 あわ の心 せと受け入れ の強さも持ち合わせ たり、 どう

でもない 同 じ立場に置かれたら、 限りは 僕と同 様、 余程 誰だ って鬱々とした気 のプラス思考な人 間 持

その水かさを増やし、しかも怒 ちを抱くに違い を濡らす程度だった小波は、い 彼女達に出会ってから、 な \ <u>`</u> 緩やか 涛 つの の如 に押し寄せ 間 く押 12 か l 首 寄 7 元 せ ま 足 る で 元

とした筈のスクールライフを飲み込んでいったこと 荒々しい波へとその姿を変えて僕の平穏でまったり は 確 かだった。

だけ じなんて真っ平御免だ。どうせ引き当てるなら、 てものなんじゃない もが羨むようなまでの見事な大当りがひきたい 籤運が いいわ 当りは当りでも、 り な Ň かでは、 けでもない かと思う。 なく、 僕 引き当ててしまったのは それ で 誰だってそうだろ? は が素 あるけど、 直 な気持ちっ 貧乏く 誰

4

になればなる程、惨めになってくる。いと思う。その結果に対して悪態をついて後ろ向きハズレの当たりくじ。そんな当りはこの世に必要な

い予測が音を立てて崩れ去ったのは、やはり入学式を送るつもりだった僕。普通ならこの外れそうもなている。何の変哲もない、まったりとした高校生活壇上で全校生徒を目の前にして居心地の悪さを感じ増上で全校生徒を目の前にして居心地の悪さを感じ代わってやるよ。

七日からの事を思い起こしてみた。僕は視線を遠くに見据える。そして遡ること四月

からだったと結論づけた。

## 【四月七日・月曜日 皐月高校入学式】

卒業証· り行わり にさし 桜の カゝ 地球温暖化となんら 訂正されるという、これ 開 世 書を受け取 ħ 花は異様に遅くて中学の卒業式は寒い かか ってから上 は 蕳 る事になって厚着するも寒く、震えなが の人々は ってようやく暖 のところの った。 一旬 語 の間 かの関係があるのではなかろう っていた。 異常. 気象庁 また異常な気候で、これ に雪が二回も かか になってきたも 気象によるため 0 開花宣 振った。 量が二 中で執 か Ō の、 回 中旬 t Ď

増し いう心 やドラマとか うらら このまま入学式が て かな目 桜 いって例年と変わらない気温に 配をよそに、 のほ 0 差しといい、 のかなピンクが 描写にありがちな入学式 思い出 · 寒 か ったら嫌だなぁ 雲 ī たかのように暖かさは 映える。 一つ無い 青く澄み切っ そんな、 落ち着いた。 八日和となっ ……なん 映画 7

通って た同 区 内 内 0 た中 閑 0 高 静 学の 校と併 な 住 才 宅 シ 合 街 ボ して建設された新学校。 に あ 口校舎と違って、 る 皐 爿 高 校 は 老朽 廊下 僕が や教 化

この美しさを、これからの高校生活を記すノー室の床や壁は汚れや、傷ひとつなく綺麗だ。

 $\vdash$ 

た座席表で座席を確認していた時のことだった。えながら、D組の教室の前に立って、廊下に貼られき記すことになるのだろう。そんな気障なことを考の真新しい一頁目に見立ててみた。ここには何を書

崇と高橋一樹がそこにはいた。 タメーン たかだかす。 りそうになる。振り返ると中学で同 僕の背中を力一杯に叩く奴がいた。

息が

瞬、

詰ま

級

生だ

0

た

.只

オハヨッス」

ば ハート)を舌に雷 いて。 いっぱん まだらい 一八○センチを越す、高橋が僕の後ろから腕を伸「同じクラスだぜ。俺、ここね」

子にモテる。ただ背丈があるだけでなく、外見もいい。だから女ただ背丈があるだけでなく、外見もいい。だから女ばして自分の座席を指し示す。こいつは身長が高い。「ノ(せンヲを起す」高権が僕の後ろから勝を伸

ば 0 その外見とモテぶりも分けて欲し なんかは少し分け ましいが、 見た目。 一六〇を超えたか 自 全てが 1分自身 てもらい 標準的レベルな僕からし で並だと主 超えない たい。 か 張 0) でする 身長に、 いものだ。 癪だが、  $\tilde{O}$ は 大 たら身 (変おこ できれ

だよな ( そうそう、 俺はここ ね

本人曰く、勉強 こいつは 0 )後ろ V Ō 座 のし過ぎで視力が落ちたそうだが つ見ても分厚い 席 を、僕と同 眼鏡をかけている。 0 只野が指

漫画の読みすぎの間違いなんではないかと思う。 右目が〇.〇六、左目〇. 八という、普通の生活

描いてみるのだが たりするかもしれない。どんな顔になるか心で思い つぶらな瞳が た顔を一 眼鏡なしで生活できないというコイツが眼鏡を外し にも支障が出そうなガチャ目の視力なんだそうで、 度も見たことがない。意外と眼鏡を外すと、 出現したりするお約 目を閉じてみても全く想像が付 東の可愛い系だっ

「お前 は、ここ」 カゝ

ない。

姓であ り 口 そう言って只野が示してくれた場 Iから る いるから、仮に男女別々で配置されて、 席 次は 岡 数えた一列目の前から二番目 本が属するア行と、 遠 V 0 男女混合の あいうえお タ行である高 所 力は、  $\mathcal{O}$ 座 教室 席 順で構成 橋 ただ · 只 僕の の入

自

分の席に鞄を置いて教室を見回す。黒板 野たちと席が離れるのは仕方がない事だ。

真 W 高

 $\dot{O}$ に ħ 置か 新品 な き深緑 れた 黒 色が 板 消 一際目を引いた。 ï は、 白墨が付着 チ してい 3 ーク ない を置 <

差

<

穢

青春 の一ペ ージって感じだよな

隣で不意に発した只野の言葉に、 「あっ、それさぁ、僕も思った」 僕は反応した。

ないか。その一ページ目に何を書くよ?

おやおや、その表現

い

į,

ねえ。

まさに

青

春

B

を見回

していた。そんな様子を不思議に感じた僕は とは高橋の言葉だが、 彼はソワソワと教室

尋

可愛い女子はいないか な あ、 と思ってさ」

「で、可愛い女子い

た?

「 何 ?

どうした?」

にゃはは、と笑って只野がふざけて尋ねると、視

線をこちらに戻した高橋はニカッと笑って答えた。 「これから探す」

な高 橋 ん中にいることを実感。 語 尾を強め、 の決意の程というか意気込みを見て取った。 橋  $\mathcal{O}$ 様子を笑い ぐつ と硬く握 つつ僕らは、 これからの高校生活はこ う締 8 まさに青春のど た 右 手 0 拳に、 そ